

仙石山論集

第3号 (平成18年)

Sengokuyama Journal  
of Buddhist Studies  
Vol. III, 2006

# 『大仏頂別行法』の基礎的研究

林 敏

## 『大仏頂別行法』の基礎的研究

林 敏

## 1. はじめに

『大仏頂別行法』は大正蔵第19巻(第947番)に収められ、《大仏頂如来放光悉怛多般怛羅大神力都撰一切咒王陀羅尼經大威徳最勝金輪三昧咒品第一》という長いタイトルが正式名である。これは日本の延久3年(1071)に書写された東寺三密蔵本を底本としたものであるが、本經は經録の中に一切記載されていない。しかし、敦煌遺書の中には、14種の写本が発見されている。これらの敦煌写本の中には完本と抄録本の2種類があるが、これらが同一系統の訳本であるかどうかを検討する必要がある。あわせて、大正蔵本とは別の同本異訳であるかどうかとも検討しなければならない。最近、新たな異本が大阪府河内長野市天野山にある金剛寺から発見された。金剛寺一切經の「録外—14」にはA・B・Cの三断簡がある。平成17年5月、落合俊典教授がA断簡を発見され、11月の金剛寺一切經調査で、さらにB断簡とC断簡を発見された。現在筆者がそれらの翻刻文を作成し研究している途中であるが、基礎的研究中間報告として発表し、諸先生諸学友の御批評をいただき、さらに研究を深めたい。

本発表では以下の問題を明らかにする考えである。

- (1) A断簡・B断簡・C断簡三部分の関係。
- (2) 「録外—14」の金剛寺系統と大正蔵本系統\*・敦煌本系統の関係。

\* 大正蔵 No. 947 『大仏頂如来放光悉怛多般怛羅大神力都撰一切咒王陀羅尼經大威徳最勝金輪三昧咒品第一』(以下、大正蔵本と略称)

- (3) 本經が典拠とする經典

さらに、「録外—14」が中国で撰述・編集されたのか、或は日本で撰述・

編集されたのかという問題を解明して、本経の成立年代、東アジア仏教史における位置などを探っていきたいが、紙数の都合で、本論文では（1）と（2）を中心に、（3）を部分的に含めて、論説していきたい\*。残りの問題は別の論文にて検討する予定である。

\* 本論文の内容の一部は年7月5日に香港中文大学で開催された2006年東アジア年輕仏教学者研討会において中国語で発表した。

## 2. 「録外—14」（金剛寺本系統）の考察

### （1）テキスト（A断簡 B断簡 C断簡）

#### A. 書誌と概要

「録外—14」には、不連続と見られるA断簡・B断簡とC断簡を有する。表紙・外題・内題・尾題と奥書などを欠いている。書写年次は明確ではないが、金剛寺の一切経の書写年代が明確であることから、おそらく書写年代は平安後期（1086年から以後）と思われる。楮打紙を使って淡墨界を持ち、三断簡であわせて六紙半である。

#### B. 法量

それらの法量は以下の表に示した通りである。

表 1

	A断簡（2紙目）	B断簡	C断簡
縦	262mm	260mm	261mm
横	531mm	266mm	483mm
界高	205mm	200mm	202mm
天界	27mm	28mm	28mm
地界	30mm	32mm	31mm
界幅	17mm	19mm	16mm
行	32	14	29
第二行の字数	18	17	16

A 断簡は五紙、第一紙 32 行、第二紙 32 行、第三紙 32 行、第四紙 32 行、第五紙 32 行。一行 17 字を基本として、総じて 160 行、2,602 字を有する残欠本となっている。

B 断簡は半紙、一行 17 字を基本として、総じて、14 行、216 字を有する残欠本。

C 断簡は一紙、一行 17 字を基本として、総じて、29 行、449 字を有する残欠本。

A・B・C の三断簡が一つの經典だとすれば、あわせて 203 行、3,267 字を有する残欠本となる。

#### C. 書風の特徴—筆、紙、墨、界線—

A 断簡は特徴ある楷書風である。京都国立博物館編の『古写経—聖なる文字の世界—』<sup>1</sup>によれば、平安時代後期の写経は、奈良時代に次ぐ写経の第 2 のピークを迎えるが、写経が仏教のテキストとしての使命をほぼ終えつつある時期にさしかかったことと、書写の功德とその作善の功德のみを追求するようになったことが指摘されている。書風の特徴としては、和様の書体の中に書き手の個性が前面に押し出され、全体的に筆線もやや太くなる傾向にあるといえるという。しかし、A 断簡は個性的な特徴があるといえるが、全体的に筆線は、やや細くなる傾向にあるといえる。書体はとても飄逸的で上品とも言えるだろう。筆はおそらく今筆<sup>2</sup>である兎毫竹管（或は鹿毫竹管）の筆であろう。墨書であるが、界線はとても薄い淡墨線である。

B 断簡は筆線もやや太くなる傾向があり、行書に近い書体といえるだろう。また、墨書は A 断簡のものよりやや新しく見え、界幅はやや広くなる傾向にある。

C 断簡の書体・特徴は B 断簡と同じである。

---

<sup>1</sup> 京都国立博物館編『古写経—聖なる文字の世界—』（京都国立博物館、2004 年、21 頁）

<sup>2</sup> 藤枝晃『文字の文化史』（岩波書店、1992 年）によれば、篆—隸—楷という書体の変遷は、古筆—秦筆—今筆という筆に応ずるものであった。日本では楷字を書いた奈良時代の筆は、今筆の兎毫竹管であったという。（83～84 頁）



以上の観察からさらに詳しく分析すると以下のように考えられる。

第一に、A・B・Cの三断簡は同一人の筆で書かれているとは言い難い。しかし、それぞれは一筆で書かれたと見てよいだろう。

第二にA・B・Cの三断簡の用紙はどれも同じ薄い黄色の楮打紙である。

第三に、A断簡の最後の紙とC断簡の紙には同じ形状と見られる虫食いがある。

第四に、A断簡の最後の行、すなわち160行目の後半部分とB・C二断簡は同一人の筆によるものと見られる。例えば、A断簡の「復次」「若」「欲」「遠」「渉」「誦」などの文字とB・C二断簡の該当の箇所の書体がよく似ている。

第三・四の点が成立すれば、A・B・Cの三断簡は連続性があるといえるだろう。

#### (2)「録外—14」の思想内容

断簡はもともと経典としての序分・正宗分・流通分の三段を持っていた可能性があるが、序分も流通分もともに残っていない。正宗分のみが部分的に残っていると見てよいだろう。いずれの断簡も正宗分の部分と見てよいだろう。登場人物は阿難と仏であるが、具体的には以下の通りである。

A断簡は、

まず、この呪を誦持・書写・解説・保存・供養すれば、世俗の無量福德・利益と無量智慧・功德を得ることができる。また、身の中にある一切の極大な重罪・悪業・障難を消滅することができ、さらには、諸仏・菩薩など衆聖の護衛を得て、無生忍を悟ることができる。

次に、諸病・業障・災難・賊盜・悪人・悪口・虫害・溺水・生産・不孕・障害・鬼嬖・安宅・遠行など諸問題がこの呪の力によって、解決することができる」と述べている。

B断簡は、

以上のようにこの呪を誦持して、この呪の力を商売・畜疫・病苦・賊盜・兵法など種々なる場面に使用すれば、富貴・安定など世俗の豊かな生活を送ることができると述べる。

C断簡は、

以上のようにこの呪を誦持すれば、災難・怖畏・病苦・悪人・貧窮などの問題を解消し利益・財富・安穩・解脱などが与えられると説かれている。具体的な内容を上に挙げてみたが、ほかに下記のような特徴も見られる。

第一に、誦呪の利益と功德を強調しているが、呪、すなわち陀羅尼には直接触れていない。さらに、曼荼羅・契印も含まれていない。

第二に、至心、誠心があって、さらに菩提心を発すれば、衆聖から加被されて、呪力が倍増し、解脱することができると説いているが、最も重要視されているのは、世間の人々の普通の生活にかかわる商売・畜疫・病苦・賊盜・災難・恐怖・悪人・悪口・虫害・溺水・生産・不孕・障害・鬼嬖・安宅・兵法・遠行などの諸問題に対して、呪法を使って解決することができるという点である。

第三に、經典としてありえない文章が一箇所見られることである。すなわち、C断簡の17行目に「一切口舌悪人、自然散滅。別本云、或称彼人名字。」とある。「別本云」というのは、別の写本か或は異訳本か、意味がはっきりしないが、経疏、経義解釈、テキストの紹介などに使う言葉である。経の本文の中に現われるのは不自然といえよう。なぜそういう事になったのか理由を考えてみなければならない。

一つの考えは写本を書写する時に2本、或はそれ以上の同一經典の写本があり、「別本」と親本の内容が異なる所に、別本の異なる所の内容をも挿入して、「別本云」とした可能性がある。又、大正蔵本の奥書には「(朱) 此書似誤多以他本可校之」(此の書、誤り多くに似たり。他の本を以て之を校すべし)とあったので、「他本」が何種類も存在したと想定される。このことからみれば、日本の平安中後期には本経がかなり広がっていたと考えられる。さらに、次節にあげる14本の敦煌写本もあることから、中国の唐代にも多くの人々が本経を受容したと考えられるだろう。

第四に、A・B・Cの三断簡の内容が連続するか否か分析してみよう。

#### A断簡

160 復次有法、若欲遠涉他方、誦呪

#### C断簡

1 咒水、以散四方、各於方面、誦呪一遍、能令道

## 2 路通達、人見歡喜。

これはA断簡の内容「また次に法有りて、若し遠く他方に涉らんと欲せば、咒を誦へて」、C断簡「呪水を以て四方に散らし、各の方面に於て、一遍に誦咒すれば、能く道路をして通達せしめん。人見て歡喜す。」とつながる。

### C断簡

28 復次有法、若於海水岸边焼香

29 誦咒、一切龍魚阿修羅、悉來供養。

### B断簡

1 或以摩尼之珠奉送咒者。

これも「また次に法有りて、若し海水の岸邊に於て焼香して、咒を誦へば、一切の龍・魚・阿修羅、悉く來たりて供養す。或は摩尼の珠を以て咒者に奉送す。」と結びつくのではないだろうか。

以上の考察から見れば、A・B・Cの三断簡は連続性が在るといえる。まず、AとCはそのまま通読することが可能である。つまり、Aの「遠渉」とC「四方」・「道路通達」が密接に関係している。次に、Cの「海水岸边」に「焼香誦咒」して、「一切の龍・魚・阿修羅」悉く（咒者）に供養して、さらに、Bの「摩尼之珠」を「咒者」に「奉送」と読めるのである。

## 3. 大正蔵本系統の考察

### (1) テキスト

大正蔵本については、小野玄妙氏主編の『仏書解説大辞典』<sup>3</sup>と鎌田茂雄

<sup>3</sup> 小野玄妙主編『仏書解説大辞典』に「『大仏頂如来放光悉怛多般怛羅大神力都撰一切咒王陀羅尼經大威德最勝金輪三昧咒品』。大仏頂別行法、大仏頂如来放光悉怛多般怛羅大神力都撰大威德記最勝金剛三昧咒法。一卷。大正一九・一八〇 No. 947。この経は仏が舍衛國祇樹給孤独園に於いて迦葉等の大阿羅漢、普賢・文殊等の諸大菩薩、毘俱知神等の諸神に対して、末法相應の教として説かれたものである。二品から成り、第一を大威德最勝金輪三昧咒品と云ひ、第二を放光悉怛多般怛諸菩

氏総監修の『一切経解題辞典』<sup>4</sup>に紹介があるが、私が調べる限り、本格的な研究はまだ誰も行っていないようである。現存するテキストは、大正蔵本と東寺三密蔵本<sup>5</sup>を合わせて2本（活字本1本、写本1本）になる。以下、諸本について紹介する。

A. 活字本—大正蔵本（経典番号 947）〔底本：延久三年写東寺三密蔵本〕—

版本西藏大蔵經の2本の目録（『西藏大蔵經総目録索引』<sup>6</sup>・『北京版西藏大蔵經目録』<sup>7</sup>）と『二十五種蔵經対照考釈』<sup>8</sup>を探したが、本經を取めているのは大正蔵のみである。大正蔵本は『大正蔵』19巻、180頁上段から188頁下段にかけて9頁の本文がある。首尾完、タイトルと奥書を含めて782行。約13,000字を有し、首題・尾題がともに有る活字本である。尾題には「巻第二」とあるから、本經は全二巻、或は二巻以上あったと考えられる。

B. 写本—東寺三密蔵写本—東寺三密蔵本—

残念ながら見るができないが、奥書の記録の通り延久三年、すなわち、1071年の写本で平安中期の写經に属することがわかる<sup>9</sup>。

薩萬行品と云ふ。この白傘仏頂を大仏頂とも称し、經の二品に於て護身結界、其の他惡宿等の種種の障難を除去する作法が明かされてある。」（455頁③）とある。

<sup>4</sup> 鎌田茂雄総監修『一切経解題辞典』（大東出版社、2002年）に「大仏頂別行法、大仏頂如来放光悉怛多般怛羅大神力都攝大威德記最勝金剛三昧咒法ともいう。【内容】二巻。經名に大威德記最勝金輪三昧咒品第一とあり、大仏頂如来放光悉怛多般怛諸菩薩萬行品第二とある。如何んが懺悔、供養、歸依、弘願、衆生利益等を投問し、その各々にわたって詳細に説かれ、「仏印都由三十二、菩薩印十、金剛一十二、天四十、天日月十九、鬼十一。陀羅尼八十六」が説かれている。【訳者・訳年代】不明。（福田亮成）」（279頁③）とある。

<sup>5</sup> 東寺三密蔵本。筆者未調査。

<sup>6</sup> 東北帝国大学法文学部編『西藏大蔵經総目録』（名著出版、昭和45年、117頁）

<sup>7</sup> 『北京版西藏大蔵經目録』（鈴木財団版、昭和37年）

<sup>8</sup> 蔡運辰『二十五種蔵經目録対照考釈』（新文豊出版公司1983年）

<sup>9</sup> 大正蔵卷十九には次の文が見られる。

「或本題云大佛頂如来放光大神力都攝大  
威德記最勝金剛三昧咒法  
大佛頂如来放光法卷第二

## (2) 経録上からの考察

『二十五種藏経目錄対照考釈』と『二十二種大藏経通検』<sup>10</sup>を確認したが、いずれも載っていない。また『西藏大藏経総目錄』（東北大学編）と『北京版西藏大藏経目錄』（鈴木財団版）をも探したが、西藏大藏経の中にもなかった。また入唐八家の諸目錄等も調べたが記載されていなかった。この經典が中国の唐代・日本の平安時代にかなり流行したと想定されるにもかかわらず、経録の記載が残っていないのは不思議なことである。日本に誰が何時伝えたかは不明である。入宋僧法濟大師耆然（938～1016）は宋太宗から賜わった開宝刊本大藏経と新訳経 286 卷を日本に将来し、将来された刊本大藏経と新訳は京都の法成寺に保管されていたが、火災にあつて、すべて焼失したといわれている<sup>11</sup>。また目錄も残っていないので、たとえ耆然が将来した新訳経 286 卷に本経があつても調べることは不可能である。

## (3) 訳者は善無畏（637～735）か

大正藏本のタイトルの下の所に小字で「又名大仏頂別行法無畏出」<sup>12</sup>とあるが、善無畏は無畏ともいうから、善無畏が訳したことを示している。善無畏の訳経は『開元録』<sup>13</sup>『貞元録』<sup>14</sup>ではいずれも 4 部 14 卷であるが、その中に本経は入っていない。鎌田茂雄博士が『中国仏教史』巻 6 に示すように、善無畏の訳経は『大日経』等 4 部以外に 20 余部の多きに及んでいるが、その中には善無畏訳の可能性のある經典もあるし、善無畏に仮託した後人の作もあるという<sup>15</sup>。本経の訳者については今後さらに詳しく検討する必要がある。

---

（朱）此書似誤多以他本可校之

（朱）干時□□三年十二月

校了

延久三年十二月十丑□□寫了」（T19p188c）とある。

<sup>10</sup> 童瑋編《二十二種大藏経通検》（中華書局、1997）

<sup>11</sup> 木宮之彦『入宋僧耆然の研究』（鹿島出版会、昭和 58 年、90 頁）

<sup>12</sup> T19p180a7

<sup>13</sup> T55p571a

<sup>14</sup> T55p874c

<sup>15</sup> 鎌田茂雄『中国仏教史』巻 6（東京大学出版会、1999 年、401～402 頁）

#### (4) 大正蔵本の内容構成について

##### A. 内容構成

小野玄妙氏主編『仏書解説大辞典』と鎌田茂雄氏総監修『一切経解題辞典』が大正蔵 947 の経典を紹介しているが、それぞれ「一卷二品」<sup>16</sup>と「二卷二品」<sup>17</sup>とされている。大正蔵の奥書に「大仏頂如来放光法卷第二」<sup>18</sup>とあるが、しかし「卷第一」はないのである。恐らく二巻の写本が東寺三密蔵本にあったのではないだろうか。残念ながら東寺三密蔵本は見る事ができない状態である。両書ともに二品とされているが、実際は六品から成り立っている。以下六品の内容の概要を示す。

##### 第1品：大威徳最勝金輪三昧咒品第一（478行）

此の品の前文は本経の序分を含めっていると見られる。すなわち、仏は舍衛国祇樹給孤独園において、次々に現れる諸大阿羅漢・大菩薩・咒神・金剛・天子・薬叉王・天龍・鬼神・比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷・六師外道などに対して法を説かれている。具体的な登場人物は仏と阿難、観世音菩薩、それから、六師外道の富蘭那迦葉である。

具体的な内容は、下記の通りである。

- ①六師外道を降伏する。
- ②撰心・伏心の方法を説く。
- ③道場を立てる方法を説く。
- ④観世音菩薩が陀羅尼を説く。
- ⑤「仏頂如来放光摩訶悉怛他般多羅撰一切咒王最勝金輪帝殊羅金剛大道場陀羅尼」と名づく神呪があることを説く。
- ⑥十方の大菩薩は釈迦如来に献花して供養する。
- ⑦世尊が大神呪を宣説する（この品には仏の印三十二種類のみが説かれ、残りの印である菩薩印十・金剛一十二・天四十・天日月十九・鬼十一はそれぞれ残りの品に説かれている。全品であわせて八十六種類の陀羅尼が説かれている）

<sup>16</sup> 同注 3。

<sup>17</sup> 同注 4。

<sup>18</sup> 同注 9。

- ⑧この呪を持すれば、商売・畜疫・賊盜・兵法・災難・恐怖・惡人・惡口・虫害・溺水・生産・不孕・障害・鬼嬖・安宅・遠行などの諸問題を解決することができる。
- ⑨この呪を持すれば、罪を滅して災障を銷し、無量功德・福力・利益を得ることができる。

**第2品：大仏頂如来放光悉怛多鉢怛羅諸菩薩万行品第二（55行）**

仏が諸菩薩を呼ぶための呪と印の法について説く。すなわち、不空罽索菩薩・馬鳴菩薩・觀世音菩薩・文殊師利菩薩・龍樹菩薩・千手千眼菩薩・虚空藏菩薩・地藏菩薩・日藏菩薩・龍仙菩薩のそれぞれの菩薩を喚ぶ神呪と印契を説いている。それぞれの呪印を持すれば、千劫の罪を滅すと説いている。

**第3品：大仏頂如来放光悉怛多諸金剛品第三（63行）**

仏が諸金剛を呼ぶための呪と印の法について説く。すなわち、金剛藏王金剛軍主・央俱尸金剛・（吒）訶娑金剛（また大笑金剛と名づく）・大摧碎金剛・商羯羅金剛・馬頭金剛・尼藍婆金剛印咒曰（また大青面と名づく）・烏樞沙摩金剛・火頭金剛・金剛童女・金剛連鎖・蘇悉地金剛のそれぞれの金剛を喚ぶ神呪と印契を説いている。

**第4品：大仏頂如来放光悉怛多諸天品第四（61行）**

仏が諸天王を呼ぶための呪と印の法について説く。すなわち、最勝天王・帝釈天衆・東方天王・南方天王・西方天王・毘紐天・毘首羯磨天・梵天・炎摩天・兜率天・功德天・大弁才天・母子鬼天を召請する神呪と印契を説いている。

**第5品：大仏頂如来信印召一切小天咒印法品第五（50行）**

仏が一切小天を召す呪と印の法を説く。すなわち、一切小天・一切星天・一切龍鬼神（即ち阿修羅軍衆・一切阿修羅王・一切龍王・一切藥叉衆・一切羅刹軍・一切乾闥婆軍・一切大黒天軍衆・一切緊那羅軍衆・一切莫呼洛伽・一切迦樓羅・一切女藥叉・一切女軍羅刹・一切龍女軍・一切木神・一切花果神）を召喚する神呪と印契を説いている。

**第6品：如来口印召一切藥叉將軍品第六（58行）**

仏が一切藥叉將軍を召す呪と印の法を説く。すなわち、散指大將・阿吒

婆拘大將・摩尼跋陀・鳩槃荼王・遮文荼・尼蜜利・那吒鳩伐羅天王・大自在天・三十二天衆など護壇將軍を召喚する神呪と印契を説いている。

そして、仏は仏頂契・天契・結契（集契）・如来信印などを組み合わせ仏頂壇の作り方を大衆に附嘱する。

以上のように、本経は序分・正宗分の二段を持っていたが、流通分は含まれていなかった。その代わりに、仏は仏頂壇の作り方を大衆に附嘱したのではないだろうか。

以上、内容構成を簡単に紹介したが、詳しい検討は今後の課題としたい。

#### B. 敦煌写本—日本撰述説の排除—

最初は、本経は日本で撰述した可能性もあると考えたが、14本の敦煌異本の存在から、その可能性は排除されるだろう。

#### C. 首楞嚴經（十卷本）と同文の部分

大正蔵本の建立道場の部分と『首楞嚴經』巻七の建立道場の部分<sup>19</sup>とはほぼ一致する部分がある。さらに、敦煌本の陀羅尼部分・陀羅尼文以降の部分と『首楞嚴經』巻七の首楞嚴呪の部分とも類似した所が多い。本経と『首楞嚴經』巻七の関係が興味深い。以下にも言及するが、詳しい検討は今後の大きな課題とする。

## 4. 敦煌本系統の考察

### (1) テキスト

金剛寺本・大正蔵本・敦煌本を比較するため、現在、翻刻文を作成している途中であるが、陀羅尼の文章が難しくて立ち往生していた所に、敦煌文献の専門家である方広錫先生からご教示を頂き、李小栄氏の『敦煌密教文献論稿』<sup>20</sup>と、敦煌写本の北京図書館の B14376 号と B14799 号を私に紹

<sup>19</sup> 本経大正蔵本の第 947 号の部分（T19p1812a10～b23）と第 945 号『大仏頂首楞嚴經』の巻第七の部分（T19p133b4～c13）とはほぼ一致する部分がある。また、本経の敦煌復元本の 142 行から最後まで部分と『大仏頂首楞嚴經』の巻第七の部分（T19p134a1～p138a23）とは一部一致、或いは類似した部分がある。

<sup>20</sup> 李小栄『敦煌密教文献論稿』（人民文学出版社、2003 年）



介して下さった<sup>21</sup>。様々な人のお陰で敦煌本が 14 本あることが判明し、手もとには 14 本が揃っている。それに、大正蔵本、東寺三密蔵本、金剛寺本を合わせれば 17 本（活字本一本、写本 16 本）になる。以下敦煌諸本について紹介したい。

敦煌写本はスタイン本・北図蔵本・敦博蔵本・俄蔵本をあわせて 14 本になるが、詳しく紹介するには紙面が足りないため、表のみ示す。

表 2

序号	敦煌遺書の番号	首尾存欠	総行数	一行の字数	奥書	書写年代	書体
1	S 73*	首存尾欠	111	17	無	唐 903 年	楷
2	S 812	欠	179	17	無		楷
3	S 2542	首尾存	216	17	無		
4	S 3720	欠	423	17	無		楷
5	S 3783	首存尾欠	446	17	無		楷
6	S 5932	欠	6	17	無		
7	B 7665 (光 95)	存	159	20	無		楷
8	B 7165 帝 89)	首欠尾存	88	28	無		
9	B 14637*	首損尾存	123	27	(跋)		楷
10	B 14799*	全	39	42	有		楷
11	敦博 71*	首存尾欠	34	17	無	唐 902 年	
12	Д x 566	全	39	36	有		
13	Д x 938	首存尾欠	5	15	無		
14	Д x 938v	欠	5	20	無		

\* の記号があるものは方広鎔先生により紹介されたものである。

<sup>21</sup> 中国国家図書館（北京図書館）所蔵の B14376 号と B14799 号である。

## 分析

李小荣氏の『敦煌密教文献論稿』<sup>22</sup>によれば、敦煌密教文献の陀羅尼について写本の形式には摘抄、匯抄、附抄の三種類があるといわれるが、手もとに集めた14種写本の写真の内容を検討してみると、2種類に分けられる。すなわち、抄録本と完本の二種類である。抄録本（摘抄にあたる）は、抄本或いは録本とも言い、すなわち、經の本文から陀羅尼と偈頌を抜き出す写本であり、表2の中の3・6・7・8・11・12・13・14号が抄録本に属する。2号は首尾を欠いて、確認が困難であるが、ほとんど陀羅尼文なので抄録本に属する可能性が高い。1・4・5号は完本に属する。さらに、1・4・5号は残文の内容からみれば、重なる部分が同文であるから、同経同訳の同系統の写經であることがほぼ確実である。比較と復元ために完本の5号の1行から443行までの443行分と4号の293行から420行までの128行分と、あわせて571行分（タイトルを入れて573行になる）の敦煌本を翻刻した。

敦煌本の調卷は、タイトルに「上卷」とあるから、2巻或は3巻の写本であることがわかる。

12号と10号は晩唐の天復元年（902年）と天復2年（903年）の奥書があるから、書写年代が明白である。一方、1・2・4・5号は、捺筆に少し隸風が残っている正式な楷書である。この書体や書風からみれば、写經史

<sup>22</sup> 前注20の299頁。また12頁に、

「《大佛頂如来放光悉怛多羅大神力都攝一切咒王陀羅尼經》又名《大佛頂經》譯人不詳。敦煌遺書S3783号開頭標有“卷上”掇此為二卷、或三卷。《大正藏》第十九冊收有日本の延久三年寫東寺三密藏本《大佛頂如来放光悉怛多般怛羅大神力都攝一切咒王陀羅尼經大威德最勝金剛三昧咒品》。兩相比勘、開頭叙經之緣起部分相同、而後面的呪語用字則大異、可知兩者屬同本異譯。而B7665号寫卷首題為《大佛頂如来放光悉怛多大神力都攝一切咒王陀羅尼經》經勘校、諸卷只錄呪語、用字與S3783頗相同。可見它亦為S3783經文的同本異譯。另外、題為《大佛頂如来放光悉怛多大神力都攝一切咒王陀羅尼經大威德最勝金輪三昧咒品》的S812、S3720、S5932、Дх00566敦博071、性質與B7665号同。」と書いてあるが、実に、S3720とS3783は同本同訳である。

上最高潮といわれる盛唐代<sup>23</sup>のものに相違ない。

## （2）内容構成の検討

敦煌復元本の場合も大正蔵本の第一品に相当する箇所では、陀羅尼文と道場建立文を除き、陀羅尼文より前の部分は大正蔵本とほぼ一致している。陀羅尼文より後の部分と大正蔵本と部分的に類似している箇所がある。したがって、序分が大正蔵本と同じく完全に残されている。流通分を損欠しているが、正宗分は主要な部分を残していると思われる。以下には大正蔵本と異なる部分を検討してみたい。

### A. 大正蔵本とほぼ一致する部分（1～141行）

- ①序、仏の説法の時間・場所、聞法の諸衆などを説く。
  - ②六師外道を降伏する。
  - ③撰心・伏心の方法を説く。
  - ④観世音菩薩が陀羅尼を説く。
  - ⑤「仏頂如来放光摩訶悉怛他般多羅撰一切咒王最勝金輪帝殊羅金剛大道場陀羅尼」と名づく神呪があることを説く。
  - ⑥十方の大菩薩は釈迦如来に献花して供養する。
  - ⑦帰依の偈頌を説く。
- （以上の①～⑦は大正蔵本とほぼ同じなので、紹介を略す）

### B. 大正蔵本と異なる部分（142～379行）

⑧世尊が大神呪を宣説する。142行目から397行目までの255行、陀羅尼を合わせて422句になる。これは、439句（宋元明本427句、敦煌本426句）から成る『首楞嚴經』の首楞嚴呪と類似した所も多い。したがって、両經に深い係わりがあることはまちがいないだろう。

### C. 金剛寺本・大正蔵本と部分的に一致、或いは類似した部分（379～571行）

⑨持呪功德と利益を説く。すなわち、若しこの呪を読誦・書写・解説・持帶・収蔵・供養すれば、衆聖が擁護され、悪趣に堕ちず、衆行を成就し、能く国家を安定し、罪を滅して災障を銷し、無量功德・福力・利益を得る

<sup>23</sup> 赤尾栄慶・頼富本宏『写經の鑑賞基礎知識』（至文堂、1994年、195頁）

ことができる。この呪を持すれば、商売・畜疫・賊盜・災難・恐怖・悪人・悪口・虫害・溺水・生産・不孕・障害・鬼焼・安宅・遠行・兵法などの諸問題を解決することができるという<sup>24</sup>。

## 5. 金剛寺本と大正蔵本・敦煌本との関係

### (1) 「録外-14」と大正蔵本の比較

表 3

凡例

- 1 ..... は、大正蔵本の順番とほぼ一致、或いは類似する部分を示す。
- 2 ..... は、大正蔵本の順番と類似、或いはほぼ一致しているが、その部分が「録外-14」号においては、前半の部分に当たるのに対し、大正蔵本では第一品の後半部に当たっているため、前後倒置の部分であることを示す。
- 3 ..... は順不同ではほぼ一致、或いは類似する箇所である。

「録外-14」号（A-C-B）	大正蔵本
1 獄繫閉衆生、同時解脫、得離枷鎖故。	牢獄禁閉。皆得解脫。
2 阿難、若有衆生、於散亂心、非三摩地、心繫憶	阿難若人散亂心。非三摩地。心暫憶
3 持是咒一切諸佛、菩薩・聲聞・緣覺・金剛・天仙・	持是咒。一切菩薩。金剛。聲聞。緣覺。仙人。
4 龍神八部常來營衛、愛樂隨逐彼人、善男子。	龍神八部。常來營衛。
5 何況決定菩薩心者、彼諸聖衆、誠心覆護、各	何況決定。菩提心生。
6 各分己功德勢力、冥資加被、發彼善人神識、其	
7 人應時、心能記憶八萬四千洹河沙劫、周遍了	
8 知、得無疑惑、從第一劫乃至最後身、皆解記	
9 憶、生生不生藥叉・羅刹家及布單那揭吒・	生不生藥叉羅刹家。及一切阿修羅家。乃至餓鬼畜生等。
10 布單那鳩荼茶・阿婆婆毘舍闍並諸餓鬼	
11 畜生・阿修羅・迦樓羅・緊那羅・摩睺羅伽・人	

<sup>24</sup> B、C 二部分の具体的な検討は別の論文に譲る予定である。

12 非人等、有形無形、有想無想、有足無足、 <u>虵蛇</u>	有形無形。有想無想。有足無足。 <u>虵蛇</u>
13 <u>鼃鼃蚊虻</u> 、鳥獸蠢動含靈蟻子之類、如是	<u>蠢動含靈之類</u> 。如是惡處。
14 惡處、一經於耳、皆悉不再重受是身。善男子、	一經於耳。皆悉不再受。是身
15 若讀若誦、若書寫解說、若帶持若藏、 <u>諸色</u>	若讀誦。若書寫解說帶佩。若藏諸色。
16 供養、劫劫不生貧窮下賤、所生之身、 <u>恒識宿命</u>	供養劫劫。不生貧窮下賤。所生恒識宿命智。
17 智、富貴自在、智慧廣大、功德巍巍、無復憂懼、	<u>富貴自在</u> 。
18 常獲利益最勝之福、或得轉輪聖王家生、	
19 或得四天王宮生、或得灌頂金輪王宮生、皆	當來得諸天宮中生。
20 當端正、諸相具足、人所喜見、身得通達、心無	
21 □（障）礙、生生之身具行菩薩行。阿難若諸衆生、	
22 無有福德、誦持是咒、十方如來所有功德、悉	
23 皆回與此人、此人由是得于洹河沙阿僧祇劫不可	
24 說劫功德、不可說劫常與諸佛同生一處、	
25 無量功德聚同一處、重修永無分散。是故	是故
26 能令破戒之人、戒根清淨、未得戒者令得	能令破戒之者。戒根清淨。
27 其戒、不精進者令得精進、無智慧者令得	不精進者自成精進。無智慧者便
28 智慧、不清淨者、速得清淨。不持齋者、自成	成智慧。不淨者不齋戒。如是皆悉具足莊嚴。
29 齋戒。阿難是善男子、未誦咒者、設犯禁戒、持	善男子。未誦咒時。破持
30 咒之後、衆破戒罪、無問輕重一時消滅。 <u>縱經飲</u>	咒之後。衆破戒罪。無問輕重。一時消滅。 <u>縱經飲</u>
31 <u>酒</u> 、食噉五辛、種種不淨、一切諸佛・菩薩・金	<u>酒</u> 。食噉五辛種種不淨。能令一切金剛。諸佛菩薩。
32 剛・天仙・鬼神龍王八部、不將爲過設著不淨	天仙鬼神。龍王八部。不將爲過設著不淨

33 破弊衣服、行坐淨處及不淨處、悉同清淨。	破弊衣服。坐臥淨處。及不淨處。悉同清淨。
34 縱不作壇、不入道場亦不行道、但誦此咒、還同	縱不作壇。不入道場。亦不行道。但誦咒還同
35 入壇行道功德無有異也。阿難、若有衆生、	入壇。行道功德。無有異也（p185a25～b14）
36 廣造十惡・五逆無間重罪及諸比丘四棄罪、	
37 比丘尼八棄罪者、誦此咒已、如是重罪、猶如	
38 猛風、吹散沙聚、皆悉消滅、更無毫髮。阿難、	
39 有人從無量劫來、所有業障、至於今生、未	
40 及髮露懺悔者、積造惡業、猶如洹河沙、若能	
41 須臾贊誦斯咒、或□（繫）合掌、至心頂禮、如是惡	
42 業罪障、一時蕩盡。阿難、若有人能書寫此	
43 咒、身上帶持、若安住處、莊宅園館、宮殿樓閣	
44 或安□（幢）上、或復作塔供養、或以實函盛之、朝	
45 暮禮拜、燒香散華、歌詠贊歎、或作種種伎樂、	
46 而以供養、如是之人、身上所有一切極大重罪	
47 惡業障難、悉皆消滅、猶湯消雪、不久皆得悟	
48 無生忍。阿難、若有女人、不生男女、欲求生者、	
49 當令洗浴、著新淨衣、受持齋戒、五體投地、	
50 爲此女人、對佛像前、至心誦咒、咒水一遍、灌	
51 彼女人頂上、並帶此咒、便生福德智慧男女、	
52 諸相具足、求長壽者、即得長壽、欲求果	

- 53 報速圓滿者、速得圓滿、身命色力、亦復如是。
- 54 阿難、若有衆生、貧窮困苦、亡失家產、晝夜惶
- 55 怖、愁憂不樂、無復方計、種種厄難、逼切其身、
- 56 欲求安穩、獲現報者、當令是人、于清淨空閒
- 57 之處、懸繪幡蓋、取好淨立、作壇隨其大小、復
- 58 以種種華葉・香油・燈明供養七日七夜、至心
- 59 誦我心咒、摩訶光明悉怛多滿一百八遍、隨
- 60 心所求、皆得具足、若金若銀、若錢財珍寶、牛
- 61 羊大馬、珠玉瓔珞、谷米衣服、田宅奴婢、妻子
- 62 眷屬、種種雜物、皆得豐溢、無所乏少、現獲富
- 63 貴、安穩快樂。阿難當知、是人即得不可思議
- 64 果報利益、隨心廣用、終不永盡。一切願求、法
- 65 應如是。阿難、若有衆生、欲求教念、當於十
- 66 五日、白月圓滿盛明之時、向清淨處、以五色
- 67 彩畫一澡瓶、狀如七寶華葉、瓶中盛滿香水、
- 68 復取一華、內於瓶中、又以種種草華、圍繞其瓶、
- 69 誦咒行道、二十一遍、至心發願、願我遊行世
- 70 間、功德如佛、一切衆生、視之無厭、愛樂歡喜。
- 71 作是願已、又誦七遍、其瓶即便自轉、即取香
- 72 すい、沐浴仏像、沐浴物已、と力香水、見地福の、

73 並用灌頂洗面、如是一切衆生悉愛敬。 復	復
74 次有法、若於塔中、或淨室內、取其淨土和	次若於塔中。或淨室內。取其淨土。和
75 合栴檀、用作三級方壇、隨其大小、以種種草	合栴檀。用作三級方壇。隨其大小。以種種草
76 華而散壇上、取一琉璃瓶、盛滿醍醐、復以舍利	花。布散壇上。取一琉璃瓶。盛滿醍醐。復以舍利
77 七粒置其瓶內、即以此瓶安置壇上、作法之人	七粒。置於瓶內。置壇上。作法之人。
78 於其壇西、敷淨草座、悉心胡跪燒香散	於其壇西。敷淨席坐。至心胡跪。燒香散
79 華、誦持是咒、不經七遍。爾時舍利、即放光明、	花。誦持大咒。不經七遍。爾時舍利。即放光明。
80 照其行者、誦咒之人、發願頂禮、取此醍醐、身自	照其行者。誦咒之人。至心頂禮發願。取此醍醐。身自
81 服之、一切障難、悉皆除滅。又取舍利、作囊盛之、	服之。一切障難。悉除滅。又取舍利。作囊盛之
82 以用頂戴、一切諸佛・菩薩・天龍・鬼神恒不遠	以用頂戴。一切諸佛菩薩天龍鬼神恒不
83 離、圍繞守護、視之如佛。一切衆生、見者歡喜、	遠離。圍繞守護。視之如佛。一切衆生。見者歡喜。
84 恭敬供養。阿難、此法不可思議功德福德力、我	恭敬供養。阿難。此法不可思議。福德力
85 今爲汝宣說、慎勿遺忘、能令衆生、無諸災障、	能。令衆生無諸災難。
86 果報圓滿。	果報圓滿。((p184c9~c20)
87 復次有法、若諸衆生、先世所造、極大重罪。乘	
88 斯惡業、便即命終、應墮地獄・餓鬼畜生、邊	
89 地下賤、乃至異類禽獸或在阿鼻地獄。如是之	
90 人、若有男女親族、爲彼亡者、誦持此咒七遍	
91 或二十一遍、皆爲亡者稱名、復爲咒水七遍洗	
92 其亡者癢骨、當令亡者從彼地獄惡處漫轉	
93 生諸佛淨土及諸天宮。復次有法、若一	



切世間	
94 人、遇大量病、痿黃困苦、經垂年歲、種種針灸・	
95 湯藥・禁咒悉不能除。如是之人、皆爲先世殃	
96 咎怨讎故使然也當爲彼著病之人七日七	
97 口（夜）燒香散華、以轉陳債舊業誦滿一百八遍、如	
98 是病者、即得除愈。	
99 復次有法、若患盲聾瘡癰瘰癧拘攣、咒	
100 水一遍、洗浴其身、即得除愈。	
101 復次有法、若白癩惡瘡膿血種種苦痛、遍	
102 切其身、咒水七遍、洗浴其身、悉得除愈。	
103 復次有法、若被蜈蚣蚰蜒、守宮百足、 <u>蚯蛇螻</u>	復次若蜈蚣。蛇蝎。
104 <u>蠍蜘蛛口（蜒）</u> 蜥、毒龍猛獸、虎狼師子、熊羆口（象）	龍獸。虎狼。師子。
105 馬、豬狗之所嚙者、咒水一遍、洗浴其處、即得	馬豬狗等咬。咒以水一遍洗其處。即滅
106 消滅。復次有法、若被火燒、咒油一遍、以塗燒處、	
107 即得消滅。	
108 復次有法、若爲水溺、咒沙一石、以火上熬、然後	
109 口（又）咒一遍以埋溺人、即得除差。復次有法、若	復次有法。若
110 被符書咒咀厭蠱因即成病、咒白芥子七粒、	被符書咒咀厭蠱成病者。咒芥子七粒。
111 以打病人、打即得知其厭處、復咒水七遍、灌	以打病人。打即自知厭處。又咒一遍。灌
112 其頂上、即得除差。阿難、若天神燒、若地神	其頂上。得除差。
113 燒、若日月星辰燒、若龍燒、魔（摩）醯首羅	
114 燒、若梵天燒、若自在天燒、若摩蹉伽燒、若山	
115 神燒、若海神燒、若河江神燒、若水神燒、若大	

116 神嬈、阿修羅軋闍婆嬈、若毘舍闍鳩盤茶嬈、	
117 若布單那揭吒布單那嬈、若摩睺羅伽嬈、若	
118 阿婆婆嬈、若阿跋摩羅佉屈陀嬈、若鬼子	
119 母、若藥叉嬈、若羅刹嬈、若精魅鬼嬈、若瞋怒	
120 鬼嬈、若顛閑鬼嬈、若狂癡鬼嬈、若害哭鬼	
121 嬈、若歌儼鬼嬈、若駭鬼嬈、若耶娑鬼嬈、若魔嬈	
122 若慳口（慳）鬼嬈、若餓鬼嬈、乃至虎狼龍象熊羆	
123 嬈、咒水七遍以散之、並咒楊枝一遍、以用拂之、	
124 其鬼即皆自道名字、怖畏而去、舍彼人民、皆	
125 患除愈。復次有法、若有病人、爲鬼所著、當勅	復次有人病。爲鬼所作。當敕
126 口（四）天王守護病人、咒石榴枝一遍、以折虛空	（p184a26） 四天王。守護病人。咒石榴枝一遍打虛空
127 中、令其病人、自道鬼名。復次有法、若患虎病、	中。令其病人道名字（p184a27） 復次若婁瘡病
128 或一日二發、三日一發、咒灰一把、以用圍繞、病	或一日二日發。三日發者。咒灰一把。以用圍繞病
129 人即得除愈。復次有法、若患手足支節	人。即得除差。
130 頭目髓腦皮肉身分一切痛者、咒楊枝一遍、	
131 以用拂打、即得除差。復次有法、若有疫	
132 氣病者、咒水一遍、以散灑之、一切疫氣、悉得	
133 消滅。復次有法、若有女人產難者、咒水一遍、	
134 灌頂上、即得易生、無復苦惱。復次有法、	
135 若諸女人、不宜男女、生便交壽、咒水一遍、	
136 灌母頂上、並咒白芥子、以打頂上、復	

取華皮	
137 口（畫）一童子咒之七遍復以咒水一遍洗浴其子以五	
138 色彩囊盛彼童子、令母髻中帶之、所生男女、	
139 更不中交、皆得長壽、不爲病苦之所侵、	
燒	
140 一切鬼神、終不敢近。	
141 復次有法、若一切咒法、不得成驗、皆由業障	復次若有一切法不成驗。皆由業障
142 在身、取東流水咒七遍、以灌咒師頂上、即	在身。取東流水咒七遍。以灌咒師頂上。即
143 得成驗、令彼咒神、心生附著。	得神驗。令彼咒神心生附著。
144 復次有法、若一切咒師、身中有障難者、取	復次咒師身中。若有障難者。取
145 牛口（黃）一分、咒之七遍、以塗發際、即得無障	牛黃一分。咒之七遍。塗發際則得無障
146 難。	礙。
147 復次有法、若中毒藥之所害者、咒藍汁	復次 若有毒藥之所害者。咒藍汁
148 或井華水一遍、以灌鼻中、即得消滅。	或井花水。咒一遍。以灌鼻中。即差。
149 復次有法、若咒井華水一升經七遍、日初出	復次 井花水一升七遍。日初出
150 時、向日自服、身中諸病悉得除愈。餘水向	時。向日自服之。 諸病悉得愈。余水向
151 日散之、天下衆生、所有疫病・業障病者、皆	日散之。天下衆生。所有病障。皆
152 得消滅。	悉消滅。
153 復次有法、若一切衆生、邪搖顛倒、綺言妄語、	復次
154 或失本心、咒水一遍、復咒白芥子一粒、以	咒水一遍。及白芥子一粒。
155 投水中、以供養佛、即令服之、一切失心、還得	
156 正念、無復迷亂。復次有法、咒水一遍、散其	咒一遍。水散
157 宅中、並咒白芥子七粒、宅中埋之、一切鬼魅、皆	宅中。咒白芥子七粒。埋宅中。一切鬼神
158 不敢入。復次有法、咒水一遍、以用灌頂洗	不取入（b12）。復次有法。咒水一遍。以用灌頂。及洗
159 面、一切口舌、自然消滅、一切官事、	面一切口舌官事消滅。

悉皆解散、 160 人見歡喜。復次有法、若欲遠涉他方、 誦咒	人見歡喜。
C	
1 咒水以散四方、各於方面誦咒一遍、能 令道	
2 路通達、人見歡喜。復次有法、若有比 丘比丘	
3 尼入裏乞食、誦咒一遍、復以此 咒、咒水灌頂、	
4 無有惡人惡狗等難、食時得自滿足。復 次	復次有法。若涉
5 有法、若涉大海江河、山野曠澤、誦咒 一遍、	大海江河山川曠野。咒水一遍。
6 而去即無怖畏。復次有法、若在高山頂 上、	而去即無畏。
7 燒香誦咒、十方世界、病苦衆生、蒙其 咒力、	
8 一切飛鳥聞之、悉得生天。復次有法、	復次
9 若於山谷中或林中或空閑處、燒香散華	若 山谷中林中 空閑處。燒香散花。
10 誦咒、一切諸佛・菩薩・天龍・鬼神、 悉來現	誦咒。一切諸佛。菩薩。天龍。鬼神。 悉來現
11 身、爲說妙法、乃至授與神仙之藥。復 次	身。爲說妙法。乃至授與神仙之藥。 復次
12 有法、若患熱風頭痛、面目熱疼、咒	若患勢風。頭痛。面目熱疼。咒
13 蘇酪蜜一遍、以塗痛處、即得除愈。	蘇酪蜜一遍。塗之即愈。
14 復次有法、若一切惡獸、欲食衆生、誦 咒指	
15 之、即伏不起、俱得解脫。復次有法、 若	復次 若
16 有惡人、欲來相害者、日未出時、至心 誦咒三遍、	有惡人。欲來相害者。日未出時。至心 誦咒三遍。
17 一切口舌惡人、自然散滅。別本云、或 稱彼人	一切口舌惡人。自然消滅。(p184a18~ b23)
18 名字。復次有法、若黑月二十九日夜、 向曠野	復次若黑月二十九日夜。向曠野
19 塚間、燒香誦咒、即得毘闍鬼、而來頂 禮、或	塚間。燒香 誦咒。即得毘舍闍鬼。而 來頂禮。或
20 將珍(珍)寶供養。若欲令使者[看]	將珍寶供養。若欲令使者看事。一切善

<p>事、一切善惡</p> <p>21 悉知。復次有法、每日取上妙華菓咒之</p> <p>22 七遍、以用供養諸佛、令人飲食充足、衣</p> <p>23 服亦然、無所乏少。衆生見者、愛念恭敬。</p> <p>24 復次有法、若取胡麻稻穀蘇酪密（蜜）相和</p> <p>25 用指撮之、一咒一燒、如是作法七日令人</p> <p>26 得大財物、一切所求、皆得如意。復次有</p> <p>27 法、若欲求索他人財物、誦咒七遍、往求必得。</p> <p>28 無有違逆。復次有法、若於海水岸邊燒香</p> <p>29 誦咒、一切龍魚阿修羅、悉來供養。</p> <p>B</p> <p>1 或以摩尼之珠奉送咒者。復次有法、若</p> <p>2 於淨室。燒香誦咒。一切天女悉皆現身作天</p> <p>3 妓樂。供養咒師。或從求索。天上飲食、悉</p> <p>4 皆隨意、充足所須。復次有法、若人相憎</p> <p>5 疾者、咒水七遍、散彼兩家門上、俱生喜悅</p> <p>6 無復瞋恨。復次有法、若欲賣買市易、</p> <p>7 咒孔雀尾一遍、持之而行、得大利。</p> <p>8 復次有法、若人猝死、或經一日二日、誦咒二十</p> <p>9 一遍。復咒石榴枝、打頂上七下即活。</p> <p>10 復次有法、若六畜疫癘、咒井華水一遍、與</p> <p>11 飲之即差。復次有法、若有惡賊、欲來卻</p> <p>12 棄、咒白芥子一粒、想其自身、猶如金</p>	<p>惡</p> <p>悉知。(p184c23~25)</p> <p>復次有</p> <p>法。欲求索他人財物。誦咒七遍往來皆得</p> <p>復</p> <p>次</p> <p>於淨室中。燒香誦咒。一切天女悉皆現身。作天</p> <p>妓樂。供養咒師。或從求覓。天上飲食、悉</p> <p>隨意 復次 若人相憎</p> <p>嫉者。咒水一遍散彼兩門上。俱生喜悅</p> <p>復次 若賣買市</p> <p>易。</p> <p>咒孔雀毛一遍。持之行。得大利益</p> <p>復次 若人卒死。 經三日。咒二十</p> <p>一遍。復咒石榴枝。打頂上七下則活。</p> <p>(p184b24~c4)</p>
---	--

剛	
13 威力無比、以打彼賊、即便退散。復次 有法、若	
14 軍陳鬪戰之時于高山頂上、咒水二十一 遍、向	

## 特徴

1、「録外—14」号（A・B・C断簡を含む）の本文と大正蔵本の本文を比較すると、ほぼ一致、類似する部分は1,190文字以上ある。3,267文字を有する「録外—14」号にとっては三分の一以上の部分を占めている。これだけでも両者にはかなり深い関係が有ることは間違いないと言えるだろう。

2、そのほぼ一致、或いは類似する部分は六品の文を有する大正蔵本の第一品に集中している。

3、そのほぼ一致、或いは類似する部分は、「録外—14」号（A・B・C）においては、全文の最初から最後まで、所々に分散している。詳しくは以下のとおりである。

第1に、前文（Aの1行目から35行目）は大正蔵本の第一品の本文の最後の文（~~~~~下線部分 p185a25～p185b14）とほぼ同文である。

第2に、Aの73～86行目は大正蔵本の本文の第一品の本文の後半部分（\_\_\_\_\_部分 p184c9～20）に相当し、Cの19～22行目は第一品の本文の後半部分の文（\_\_\_\_\_部分 p184c23～25）に相当する。

第3に、Aの103行目から最後の行まで、Cの4行目から27行目まで、Bの1行目から9行目までは、大正蔵本の本文の第一品の中間部分（\_\_\_\_\_部分 p184a18～c4）と順番どおりに相当している。

## (2)「録外—14」と敦煌本の比較

表4

凡例

- 1 .....・\_\_\_\_\_ はほぼ一致する或いは類似した部分を示す。
- 2 \_\_\_\_\_ は異なる部分を示す。
- 3 \_\_\_\_\_ は「録外—14」と敦煌本とのみを持つ部分である。

「録外—14」号（A—C—B）	敦煌復元本（S3720 部分）
2 阿難、若有衆生、於散亂心、非三摩	533 阿難、若諸有情、於散亂心、非三摩

地、心繫憶	地、心憶繫
3持是咒一切諸佛・菩薩・聲聞・緣覺・金剛・天仙・	534執持者、一切諸佛・菩薩・金剛・天仙・藥叉・龍神
4龍神八部常來營衛、愛樂隨逐彼人、善男子。	535咸來隨逐擁護、彼善男子・善女人、何況決定
5子何況決定菩薩心者、彼諸聖衆、誠心覆護、各	536菩提心者。彼諸聖衆、誠心覆護、各各分已功
6各分已功德勢力、冥資加被。發彼善人神識、其	537德勢力、冥資加被。發其精神、正念不亂、心能
7人應時、心能記憶八萬四千洹河沙劫、周遍了	538記憶八萬四千俱胝大劫、周遍了知、得無疑
8知、得無疑惑、從第一劫乃至最後身、皆解記	539惑、從第一劫乃至後身、生生不生藥叉・羅刹
9憶、生生不生藥叉・羅刹家及布單那揭吒	540及布單那揭吒・布單那鳩槃荼・阿婆娑毘
10布單那鳩槃荼・阿婆娑毘舍闍並諸餓鬼・	541舍遮並諸餓鬼・畜生・阿蘇羅・迦樓羅・緊那羅・
11畜生・阿修羅・迦樓羅・緊那羅・摩睺羅伽人	542摩睺羅伽人非人等、有形無形、有相無相、
12非人等、有形無形、有想無想、有足無足、虵蛇	543無足有足 虵蛇龜鼈、蚊虻鳥獸、蠢動含靈
13鼈龜蚊虻、鳥獸蠢動含靈蟻子之類、如是	544蟻子之類、如是惡處、皆悉不生。是善男子
14惡處、一經於耳、皆悉不再重受是身。善男子、	545善女人、若讀若誦、書寫解脫、若帶若藏、諸
15若讀若誦、若書寫解脫、若帶持若藏、諸色	546色供養、劫劫不生貧窮下賤、不可樂處、所生之
16供養、劫劫不生貧窮下賤、所生之身、恒識宿命	547身恒識宿命、富貴自在、智慧廣大、功德巍巍、
17智、富貴自在、智慧廣大、功德巍巍、無復憂懼、	548無諸衰惱、常獲利益、吉祥果報、
18常獲利益最勝之福、或得轉輪聖王家生、	
19或得四天王宮生、或得灌頂金輪王宮生、皆	
20當端正、諸相具足、人所喜見、身得通達、心無	身得通達、
21□（障）礙、生生之身具行菩薩行。阿難若諸衆生、	549心無障礙、生生之身、具菩薩行。
22無有福德、誦持是咒、十方如來所有	550阿難、若有諸衆生、無有福德善根、

功德、悉	誦持是咒
23 皆回與此人、此人由是得于洹河沙阿僧祇劫不可	551 者十方如來、所有功德、悉皆回與此人。由是得於
24 說劫功德、不可說劫常與諸佛同生一處、	552 洹河沙俱胝大劫不可說劫、不可說劫劫常與
25 無量功德聚同一處、重修永無分散。是故	553 諸佛同生一處、無量功德、如惡人聚同處、薰
26 能令破戒之人、戒根清淨、未得戒者令得	554 修永無分散。是故能令破戒之人、戒根清淨、
27 其戒、不精進者令得精進、	555 未得戒者、令得其戒、不精進者、令得精進、
無智慧者令得	不
28 智慧、不清淨者、速得清淨。不持齋者、自成	556 持齋者、自成齋戒。阿難、是善男子、未誦咒
29 齋戒。阿難是善男子、未誦咒者、設犯禁戒、持	557 時、設犯禁戒、持咒之後、衆破戒罪、無問輕重、
30 咒之後、衆破戒罪、無問輕重一時消滅。縱經飲	558 一時消滅。縱經飲酒、食噉五辛、種種不淨、一
31 酒、食噉五辛、種種不淨、一切諸佛・菩薩・金	559 切諸佛・菩薩・金剛・天仙・鬼神八部、不將爲過。
32 剛・天仙・鬼神龍王八部、不將爲過設著不淨	560 設著不淨破弊衣服、一行一住、悉同清淨。縱
33 破弊衣服、行坐淨處及不淨處、悉同清淨。	561 不作壇、不入道場、亦不行道禮拜、但誦此咒、
34 縱不作壇、不入道場亦不行道、但誦此咒、還同	562 一切皆驗、一切呪法、速即成就大驗、還同入一
35 入壇行道功德無有異也。	563 切壇功德、無有異也。
阿難、	564 阿難、若有衆生、廣造十惡・五逆無間重罪、誹
若有衆生、	565 謗正法、及諸比丘比丘尼四棄・八棄罪者、誦
36 廣造十惡・五逆無間重罪及諸比丘四棄罪、	566 持此呪、一切重罪、猶如猛風、吹散沙聚、更無
37 比丘尼八棄罪者、誦此咒已、如是重罪、猶如	567 毫髮。阿難、若諸衆生、從無量曠劫已來、積造
38 猛風、吹散沙聚、皆悉消滅、更無毫髮。阿難、	568 惡業罪障、乃至今身、隨緣涉歷、爲惡縛纏、於
39 有人從無量劫來、所有業障、至於今生、未	569 佛經典、更生誹謗、作一闢提、行不信業、緣受
40 及髮露懺悔者、積造惡業、猶如洹河沙、若能	



41 須臾贊誦斯咒、或繫合掌、至心頂禮 如是惡	570 報好醜、或因妻子朋友、發彼心神、 對佛像前、
42 業罪障、一時蕩盡。	571 至心頂禮、悔過自責、先身之業、讀 誦此咒、廣

附表 4 に示すように「録外—14」と敦煌復元本（S3720 部分）の関係には以下のような特徴がある。

第一に、「録外—14」には、順番とおり「録外—14」の A 断簡 2 行目から 42 行目までに敦煌本とほぼ一致、或いは類似した部分が見られる。

第二に、A 断簡の 18 行目後半から 20 行目前半までの部分と、27 行目の後半から 28 行目の前半までの部分だけが敦煌復元本（S3720 部分）の表現とは、それぞれ異なっているが、それ以外の表現は大部分がほぼ一致する部分であり、類似した部分も存在する。

第三に、A 断簡の 35 行目後半から 42 行目前半までの表現と、敦煌復元本（S3720 部分）の 564 行目の後半から 571 行目までの表現は、「録外—14」と敦煌本とのみを持つ部分である。

第四に、A 断簡の 41 行 650 文字ほどのこの部分と敦煌復元本（S3720 部分）のこの部分は、ほぼ一致或は類似している。この部分は、3,267 字を有する「録外—14」においては、約 20 パーセントの割合になる。

以上の分析結果により、「録外—14」と敦煌本（S3783）には深い関係があることがわかる。

#### (4) 大正蔵本と敦煌本の比較

表 5

	大正蔵本	敦煌復元本（S3783 と S3720 を底本とし、奥書は俄藏 D x566 と B14799 に基づく。）
内題 or 首題	大仏頂如来放光悉怛多般怛羅大神力都撰一切咒王陀羅尼經大威德最勝金輪三昧咒品第一	大仏頂如来放光悉怛多大神力都撰一切咒王陀羅尼經大威德最勝金輪三昧咒品經卷上
尾題	大仏頂如来放光法卷第二	無
奥書	有	有（D x566 と B14799）

書写年代	延久三年（1071）：平安中期	天復元年（902年）と 天復二年（903年）：晩唐
書写者	有（未詳）	張公
一致部分	T19p180a1～p181a9； p181b23～p182b2	S3783 的 1～146 行
類似部分	① p185a11～25 ② T19p185a25～p185b14	① S3783 的 422～432 行 ② S3720 的 385～415 行
不同部分	① T19p181a9～p181b23（建立 道場） ② 異 ③ 第二品～第六品	① 無 ② 陀羅尼 ③ 無

### 特徴

第一に、両本の前半部、すなわち、陀羅尼より前の部分とはほぼ一致する。また、大正蔵本の一品の中における呪法と結印以外の本文と、敦煌本の陀羅尼以降の本文にも、類似した部分がある。

第二に、大正蔵本の呪法と結印の部分と敦煌本の陀羅尼の部分とは異なる文章である。

第三に、「録外—14」と同様に、敦煌本と大正蔵本とが一致する部分、或いは類似した部分は、大正蔵本の第一品の中に集中している。

両本の一致する部分を見れば、両本は同一経典の同系統の可能性があるが、異なる部分、特に陀羅尼と呪印部分をみれば、両本は同一経典の同系統と断定できない面もある。可能性の一つとして、同一経典の陀羅尼部分をさらにもう一度訳した異訳であることが考えられる。可能性のも一つとして、同一経典の陀羅尼以降の部分がさらにもう一度、書き加えたことにも考えられるだろう。

## 6. 本經が典拠とする經典の考察

### (1) 大正藏本・敦煌本與阿地瞿多訳の『陀羅尼集經』

#### A. 比較

表 6

凡例

- 1 \_\_\_\_\_の部分は、兩經のほぼ一致する部分を示す。
- 2 .....の部分は、兩經の類似した部分を示す。
- 3 下線を引かない部分は、異なる部分を示す。
- 4 番号は筆者が付加した。

大正藏本	『陀羅尼集經』
如是我聞。一時佛在舍衛國祇樹給孤獨園。與大阿羅漢五千人俱。摩訶迦葉。優樓頻螺迦葉。伽耶迦葉。那提迦葉。舍利弗。大目犍連。難陀。阿菟樓駄。劫賓那。阿若憍陳如。阿難。羅睺羅等而為上首。	如是我聞。一時佛在舍衛國祇樹給孤獨園。與大阿羅漢五千人俱。摩訶迦葉。優嚧毘羅迦葉。伽耶迦葉。那提迦葉。舍利弗。大目犍連。難陀。阿尼嚧駄。阿若憍陳如。阿難陀。羅睺羅等而為上首。
復有無量大菩薩摩訶薩衆。普賢菩薩。文殊師利菩薩。觀世音菩薩。虛空菩薩。彌勒菩薩。金剛菩薩。而為上首。	復有無量大菩薩 衆。普賢菩薩。曼殊室利菩薩。觀自在菩薩。虛空菩薩。彌勒菩薩。金剛菩薩。而為上首。
復有無量呪神。王毘俱知神。何耶吉利婆神。而為上首。復有無量金剛。跋闍羅吒訶婆金剛。而為上首。復有日天子。復有無量藥叉王。阿吒薄俱而為上首。復有日天子。月天子。四大天王。忉利天王。釋提桓因。大自在天。□大梵天。兜率天。首陀會天。摩醯首羅天。功德天。毘首羯摩天。并及眷屬。天龍。鬼神。阿修羅。迦樓羅。乾闥婆。緊那羅。摩睺羅伽。鳩槃荼。布單那等。復有	苾芻苾芻尼。優婆塞優婆夷。天龍藥叉迦嚧囉健達婆阿素羅緊那羅摩睺羅伽等。
無量人天王。龍王。羅刹王等。比丘。比丘尼。優婆塞。優婆夷等。無量恒河沙俱知那庾多聲聞。菩薩。人天大衆。龍神八部。前後圍遶。供養恭敬。尊重讚嘆。以諸花香。而散佛上。各各歡喜。合掌頂禮。遶佛三匝。却坐一面。瞻仰如來。目不暫捨。欲願聞最勝之法。爾時王舍城中。六師外道常行邪見。第一富蘭那迦葉。第二摩訶斯迦利弩瞿舍利子。第三散	復有無量諸大國王。輪頭檀王。波斯匿王。頻婆娑羅王。梨車毘等而為上首。
	爾時 六師外道謂。第一富蘭那迦葉。第二摩 斯迦利弩瞿舍利子。第三散杜伊倍羅貳子。第四阿質多

<p>杜伊羅臍子。第四阿質多雞除迦婆羅。第五伽俱多伽智耶那。第六尼乾捷陀若提子。如是等六大外道。將其眷屬。來詣佛所。欲與如來共相論議。時彼園中有一枯樹。名菴末羅。爾時富蘭那迦葉問佛言。瞿曇瞿非一切智。若具一切智者。云何此菴末羅樹定實死耶。得活耶。時佛世尊默然不答。爾時富蘭那迦葉見佛不答。手執白拂。以水噴樹還生花葉。扶疏花盛。須臾之間便結果熟。其富蘭那迦葉令諸弟子摘果。將與大眾。爾時會中。一切凡夫心生疑惑。歎此外道有大異怪。佛不答默然。而實為如來無一切智。不及外道。爾時世尊。知其會衆心生狐疑。即入火光三昧。從於頂上放大光明。照於三千大千世界。佛自作佛頂印。召請十方諸佛菩薩。於虛空中。無量恒河沙諸佛菩薩普皆雲集。其十方諸佛亦放光明。身出水火。現大威力。令彼枯樹。還即熟朽。摧折凋落。周其外道等煩怨悶亂。互相執手。悲啼號哭。四散奔走。爾時諸天住在空中。散花供養。種種音樂。</p> <p>(T19p180a9~b23)</p>	<p>雞除迦婆羅。第五迦俱多伽智耶那。第六尼乾陀若提子等。</p> <p>來詣佛所。欲與世尊共相論議。時彼園中有一枯樹。名菴末羅。爾時富蘭那迦葉。問世尊言。瞿曇瞿非一切智。若一切智。此菴末羅樹。定死以不。時佛知而默然不答。時富蘭那迦葉。手把白拂以水散之。拂於枯樹使樹還生。枝葉華果悉令繁茂。時彼外道。手摘果子以行時衆。爾時會中多有凡衆。心各狐疑。凡夫外道有此神異。佛定不勝。時佛世尊知會衆心。</p> <p>即入火光三摩地。從於頂上放無量光。照三千大千世界已。佛以自手作佛頂印。誦佛頂呪。於佛光中。化作無量阿僧祇苑伽沙那由他佛。其一一佛。於虛空中行住坐臥。各放無量光明。身出水火。現作種種佛威神事。爾時彼樹如故枯乾。彼富蘭那。即時倒地悶絕而臥。其諸弟子互相啼哭。爾時諸天住在空中。散華供養種種音樂。</p> <p>(T18p785b12~c14)</p>
<p>佛頂身印。</p> <p>反叉左右二無名指。二小指在於掌中直豎。二中指頭相柱。屈二食指頭。壓中指上節背。并豎二大指捻中指中節側。頭指來去。佛頂心呪曰。</p> <p>那謨薩婆若耶一唵二多他揭都烏瑟膩二合沙三阿那婆盧輕枳路四謨鬱地二合五帝殊羅施六鳴訶二合什代羅什代羅八駄迦駄迦毘駄迦毘駄迦十陀羅陀羅十一毘駄羅毘駄羅十二瞋陀瞋陀十三頻陀頻陀十四鳴訶二合泮泮十五沙呵</p> <p>(T19p183b3~12)</p>	<p>釋迦佛頂身印第一</p> <p>反叉左右二無名指二小指。在於掌中。直豎二中指。頭相柱。屈二食指頭。壓中指上節背。並豎二大指。捻中指中節側。頭指來去。即說佛頂心呪呪曰。那上音謨上音薩婆若耶一唵二多他揭都烏瑟膩二合沙三阿那跋盧輕音枳路四謨唎鬱地二合五帝殊囉施六鳴訶二合七什幡羅什幡羅八駄去音迦駄去音迦九毘駄去音迦毘駄去音迦十陀囉上十一毘陀囉毘陀囉上十二瞋駄瞋駄十三頻駄頻駄十四鳴訶鳴訶二合去音拈拈泮泮吒反十五莎去音訶</p> <p>(T18p786b5~16)</p>
<p>破魔降伏印呪</p> <p>准前身印。唯改二頭指豎頭相捻。以二中指各扞頭指上節背側。過頭相柱。并屈二</p>	<p>佛頂破魔結界降伏印呪第二</p> <p>准前身印。唯改二頭指豎。頭相捻。以二中指。各扞。頭指上節背側。過頭相柱。</p>

大指。入於掌内。先當頂戴。至心恭敬。至心誦呪曰。唵一室唎二合夜二婆醯莎訶 (T19p183b13~18)	並屈二大指入於掌内。先應頂戴恭敬印已。至心誦呪曰。唵一室唎二合夜二婆醯三莎婆訶四 (T18p786bc5~10)
奉請印。 准前身印。改二頭指直豎。相去四寸半。并二大指直豎。去中指八分。誦佛頂心呪。至要第四遍。二頭指漸漸屈入掌。呪滿十一遍。及手印和南頂禮向內散去。奉請印。請作花光印。蓮華捧足。亦名花光印。 二小指豎相捻。并二大指自餘六指散開直豎。 微曲指節。以開花勢。呪滿七遍。并屈二大指向掌内。即禮拜向內。散去蓮華印。其座呪曰。唵迦摩羅莎可（呪七遍） (T19p183b19~27)	佛頂奉請印第三 准前身印。唯改二頭指直豎。相去四寸半。并二大指直豎。去中指八分。誦佛頂心呪。至第四遍。二頭指漸漸屈入掌。呪滿七遍。反手印即和南頂禮。向內散去奉請印。即作花光印。 (T18p788a19~24) 二小指豎相捻。并豎二大指。自餘六指。散開直豎。微曲指節。似開華勢。呪滿七遍。并屈二大指向掌内。即頂禮。向內散去蓮華印。其座呪曰。唵（上聲一）迦摩囉（二）莎訶（三呪七遍） (T18p788a27~b01)

### 特徴

第一に、一致する或いは類似した部分は兩經の初めの部分だけではなく、印契と神呪の部分の「仏頂身印」・「破魔降伏印呪」・「奉請印（呪）」にも含まれている。

第二に、『陀羅尼集經』の部分がやや簡略なように見えるに対し、『大仏頂別行法』の方がやや詳しい。

第三に、両者の内容は実質的にほとんど同じである。

第四に、『陀羅尼集經』にあるところを『大仏頂別行法』の相応する部分はほぼ全部を含んでいるが、『大仏頂別行法』にある部分を『陀羅尼集經』がその全部を含んでいるわけではない。

### B. 『陀羅尼集經』及び阿地瞿多について

『陀羅尼集經』及び阿地瞿多については、鎌田茂雄博士の『中国仏教史』の第六巻に紹介されている<sup>25</sup>ように、この經のなかにおいて、はじめて三昧耶形が説かれているのみではなく、仏頂部、如来部、觀音部、諸天部などの壇法が詳しく説かれる。この經は雜部密教中、もっとも完備したもの

<sup>25</sup> 鎌田茂雄『中国仏教史』第六巻（東京大学出版会、1999年、375、720頁）

であって、密教思想発達史上、重要な經典であるという。経録によれば、『陀羅尼集經』は初唐の天竺三阿地瞿多訳の唯一の十二巻の密教經典であり、大唐永徽五年（654）四月十五日、西京の慧日寺において訳出され、天冊萬歲元年（695）十月二十四日に奉勅して編入したという<sup>26</sup>。経序と宋高僧伝にもほぼ同じように記録されている。阿地瞿多（Atigupta）は中印度の人であり、唐では無極高という。五明に精通して三蔵に妙通し、永徽三年壬子歲（652）正月、西印度より梵夾を齎して長安に到着した。僧俗同じく阿地瞿多を請い、慧日寺の浮圖院に陀羅尼普集會壇を建てる。出来上がった日に多くの靈異の現象が見られた。沙門玄楷などはその法本の翻訳を阿地瞿多に要請した。それにより、永徽四年癸丑から五年の間、慧日寺において、金剛大道場經の中より、綱要を取って訳した。これは大明呪藏分の一部である。一部、十二巻を集成して『陀羅尼集經』と名付けたと記録されている<sup>27</sup>。つまり、この經は阿地瞿多が大唐永徽五年（654）四月十五日に、慧日寺で訳し、天冊萬歲元年（695）十月二十四日に奉勅して編入し、金剛大道場經の中より、綱要を取ったものであるということである。ちなみに、両經の比較表のほぼ同じ部分、或いは類似した部分から見ても、『陀羅尼集經』は明らかに簡略化されているに対し、『大仏頂別行法』の相応する處はやや詳しくなっている。ゆえに、この両經の深い関わりがわかる。

## （2）大正藏本と唐宝思惟訳の『仏説随求即得大自在陀羅尼神呪經』

### A. 比較

#### 表 7

凡例

- 1 \_\_\_\_ の部分は、両經のほぼ一致する部分を示す。
- 2 ..... の部分は、両經の類似した部分を示す。

<sup>26</sup> 唐明佺撰『大周刊定衆經目錄』に

「陀羅尼集經一部十二卷（合三百五十紙）

右大唐永徽五年四月十五日中天竺國三藏阿地瞿多（此云無極高）於西京慧日寺譯。天冊萬歲元年十月二十四日奉勅編行。」（T55p379b1～3）

<sup>27</sup> 『陀羅尼集經』の訳経序（T18p0785a3～b4）と贊寧撰『宋高僧伝』の「唐西京慧日寺無極高伝」（T50p718b17～c2）

3 下線を引かない部分は、異なる部分を示す。

4 番号は筆者が付加した。

大仏頂別行法（大正蔵本）	仏説随求即得大自在陀羅尼神呪經*
②大佛頂陀羅尼心呪（亦名一切佛心呪） 唵（一）薩婆怛他揭多曼嚩帝（二）鉢羅伐 帝揭多婆曳（三）唵（四）奢摩演都麼麼 （某甲）寫薩婆跋閉瓢（五）莎悉底（二合） 婆羅跋都（六）牟支牟支（七）毘牟支毘牟 支（八）遮利遮利欄（九）揭底（十）婆耶 奇囉囉（十一乃解反）步地步地（十二）步 陀步陀耶（十三）勃地利勃地利（十四）勃 陀臨（十五）薩婆怛他揭多頤陀耶（十六） 樹瑟鉢（二合十七竹皆反）莎訶 大佛頂大心呪印 （略） ③大佛頂一切佛心呪印 一切諸菩薩呪印呪曰。 唵（一）跋折囉底（二）跋折囉（三）鉢囉 （二合）底瑟恥底輸提（四）怛他揭多沒陀 羅（二合）地瑟吒那地瑟恥底莎訶 大佛頂大忿怒印（略） 大佛頂縛大刀鬼印（略） ④大佛頂灌頂呪（又名大佛頂甘露呪） 唵（一）牟欄牟欄伐隸（二）阿毘誅者咩 （三）薩嚩婆怛他揭多吽（四）麼麼（某甲） 寫薩婆苾地也（二合五）毘嚩雞（六）摩訶 跋折羅（七）迦伐遮婁羅（二合八）沒嚩 （二合）嬌地利（二合）底（九）怛他揭多頤 利達耶（十）地瑟吒多跋折隸（十一）莎訶 ⑤大佛頂灌頂印（印略） 根本重罪皆得除滅呪曰。 唵（一）阿蜜嚩多伐折隸（二）嚩囉嚩囉 （三）鉢囉嚩毘輸提（四）唵唵泮泮屋屋莎 訶 大佛頂甘露印。（略） ⑥大佛頂結界呪法 唵（一）阿密嚩多（二）毘盧羯囉揭婆娑浴 剌尼阿羯羅沙尼唵唵泮泮莎訶 ⑦大佛頂大心印契	②一切佛心呪 唵（一）薩婆怛他揭（入聲）多暮嚩帝（二） 鉢囉囉（扶荷切）囉揭（入聲）多婆曳（三） 舍摩觀演麼麼（某甲）寫薩婆跋閉瓢（四） 薩婆跋曳瓢（五）莎悉底揭囉婆伐觀（六） 牟支牟支（七）毘牟支（八）折唎折囉囉揭 帝（九）婆耶阿囉囉（十）步地步地（十一） 步陀耶步陀耶（十二）勃地唎勃地唎（十三） 薩婆怛他揭多哩耶耶（十四）樹瑟鉢（陟 皆切十五）莎訶（十六） ③一切佛心印呪 唵（一）伐舌囉伐底（丁以切二）伐舌囉鉢 喇底瑟恥帝桃提（三）怛他揭多暮陀囉 （四）地瑟吒那地瑟恥帝莎訶（五） ④灌頂呪 唵（一）姥欄姥欄姥欄伐隸（二）阿毘誅者 觀迷（三）薩婆怛他揭多曼（莫甘切）麼麼 （某甲）寫（四）薩婆苾地耶毘嚩（疎禮切） 雞（五）摩訶伐折囉迦伐遮暮陀囉暮地唎 帝（六）怛他揭多哩（虛以切）哩耶耶（七） 地瑟吒多伐折隸莎訶（八） ⑤灌頂印呪 唵（一）阿蜜嚩多（二）伐囉嚩囉嚩囉（三） 鉢囉嚩囉（四）毘桃提（五）唵唵（六）泮 吒泮吒（七）莎訶（八） ⑥結界呪 唵（一）阿密嚩多吒盧羯囉（二）揭婆略剌 尼（三）阿羯囉沙尼（四）唵唵（五）泮吒 泮吒（六）莎訶（七） ⑦佛心呪

(印略)	唵（一）毘麼嚩（二）闍耶伐底（丁以切三） 阿蜜嚩帝（四）唵唵唵唵（五）泮吒泮吒泮 吒（六）莎訶（七）
⑧大佛頂心中心呪	⑧心中心呪
唵（一）跋折羅（二）跋羅跋羅（三）印地 嚩（二合）耶（四）毘輪達嚩（五）唵唵 （六）嚕嚩遮隸（七）迦嚩遮隸（八）莎訶 （T19p182b05～p183a7）	唵（一）蘇嚕蘇嚕（二）跋嚩跋嚩三跋嚩三 跋嚩（三）印涅槃耶（四）毘輪達嚩（五） 唵唵（六）嚕嚩遮隸（七）迦嚩遮隸莎訶 （八） （T20p644a12～b15）

### 特徴

第一に、『大仏頂別行法』の方は結印と神呪の両方が含まれているが、『仏説隨求即得大自在陀羅尼神呪經』の方は神呪のみである。

第二に、『仏説隨求即得大自在陀羅尼神呪經』の②の「一切仏心呪」から⑧の「心中心呪」までは、『大仏頂別行法』では神呪と印契が相応しているが、⑦の「仏心呪」と相応するのは神呪と印契ではなく、印契だけである。

第三に、一致、或いは類似した部分がかなりあったが、異なる部分も少なくない。

第四に、『仏説隨求即得大自在陀羅尼神呪經』の部分がやや簡略なように見えるに対し、『大仏頂別行法』の方がやや詳しい。長部和雄氏の『唐宋密教史雑考』によれば、漢訳ないし中国撰述の經軌に関する公式は、簡潔→敷衍・複合・雜駁→簡略・変名・変質であるが、宝思惟が訳したこの經はまだはじめの簡潔の段階であるという<sup>28</sup>。浅井觉超氏の『大随求陀羅尼經』梵藏漢对照研究』の中でも、宝思惟訳の『大随求陀羅尼神呪經』

<sup>28</sup> 長部和雄『唐代密教史論考』（永田文昌堂、1982年）の32頁の注55に

「漢訳乃至中国撰述の經軌に関して、私は、前きに、三種悉地破地獄軌の研究を遂げた際に、一応の見解を立てた。その公式は、簡潔→敷衍・複合・雜駁→簡略・変名・変質といった形式で、このように移行している跡を発見した。此の隨求即得大自在陀羅尼にあてはまると、本論に於て言い尽した結果から、宝思惟訳一一五三號＝簡潔→不空訳一一五四號＝敷衍→不空訳一一五五號＝複合・雜駁→宗叡本一一五六B號＝簡略→惟謹一一五六A號＝簡略・変名・変質→菩提流志訳九二〇號＝雜駁変名・変質ということになる」とある。



は最も早い成立であると指摘されている<sup>29</sup>。とすれば、『大仏頂別行法』は敷衍・複合の段階に属するものではなからうか。

B. 『仏説隨求即得大自在陀羅尼神呪經』及び宝思惟について

唐宝思惟訳の『仏説隨求即得大自在陀羅尼神呪經』は、不空訳の『普遍光明大隨求陀羅尼經』の異訳であるが、『大仏頂別行法』と相応するのは宝思惟の訳のみであり、『大周刊定目錄』によれば、長壽二年（693）に翻訳されたものである<sup>30</sup>。いわゆる隨求陀羅尼であり、大・中・小隨求陀羅尼が含まれている。すなわち、①根本真言（これは大隨求陀羅尼にあたる）、②一切仏心呪、③一切仏心印呪、④灌頂呪、⑤灌頂印呪、⑥結界呪、⑦仏心呪、⑧心中心呪。②～⑧は中・小隨求陀羅尼にあたるものである。これは『大佛頂別行法』（大正蔵本）と一致する或いは類似した部分である。

宋の贊寧撰『宋高僧伝』の「善無畏伝」には「唯尊奉長老尊奉三藏而已」<sup>31</sup>とある。善無畏が宝思惟のみを尊奉する人物としていることがわかる。宝思惟とは、梵訳で阿彌真那（Ratnacinta）であり、唐では宝思惟という。北インドの迦湿蜜羅国の人、幼いころに家を捨てて禪誦を業とした。具足戒を受けた後に、律品を専精し、また慧解超群・学兼真俗にして乾文・呪術が尤もその妙を工むという。天后の長壽二年（693）東都洛陽に来て、勅によって天宮寺に住し、則天武後の長壽二年癸巳から中宗の神龍二年（706）丙午までに、『不空羂索陀羅尼經』等の七部9卷<sup>32</sup>を訳した。

<sup>29</sup> 浅井覚超「『大隨求陀羅尼經』梵藏漢対照研究」（『密教文化』第162号、高野山大学密教文化研究会、1998年、91～104頁）

<sup>30</sup> 唐明佺撰『大周刊定衆經目錄』に

「隨求所得自在陀羅尼經一卷

右大周長壽二年天竺三藏寶思惟於天宮寺譯。（T55p379c26）」とある。

<sup>31</sup> T50p715c2

<sup>32</sup> 智昇撰『開元錄』に

「不空羂索陀羅尼自在王呪經三卷（亦名不空羂索心呪王經長壽二年七月於東都佛授記寺譯沙門德感筆受初出與李無諂出一卷者同本）

浴像功德經一卷（神龍元年正月二十二日於東都大福先寺譯婆羅門李無諂譯語初出與後義淨出者同本）校量數珠功德經一卷（神龍元年正月二十三日於大福先寺譯李無諂譯語初出與後義淨出者同本）

その後は経を訳さず、ただ礼誦を精勤して諸の福業を修し、竜門山に西域の制度による一寺を置いて門徒と同居した。開元九年に龍門山の天竺寺で亡くなり、壽は百餘歳だったという。宝思惟の塔銘（天竺寺）は『全唐文』<sup>33</sup>に収録されている。

## 7. 終わりに

以上の考察により、以下のことが明らかになってきた。

(1) A・B・Cの三断簡の関係は様々な可能性があるものの、A—C—Bの順番で同一經典であることはほぼ確実である。その根拠は、

第一に、テキストを分析したように、A断簡の最後の行、すなわち160行の後半部分とB・Cの二断簡は同一筆・同一書体であること。それから、A断簡の最終行後半とB・Cの二断簡の墨跡はA断簡より新しく見えること。換言すると、A断簡よりB・C二断簡の方が後で書かれた墨書である。その二点から見れば、A・B・Cの三断簡の関係はAからBCにつながっていることがわかる。

第二に、大正本を参照して比較すると、Aの103行目から最終行までと、Cの4行目から27行目まで、Bの1行目から9行目までが、大正本の本文の第一品の中間部分（\_\_\_\_\_p184a18～c4）と順番どおりに類似、或いは一致する。

第三に、A断簡の最後紙とC断簡の紙に同じ形状と見られる虫食い穴の図像がある。

---

觀世音菩薩如意摩尼陀羅尼經一卷（第二出與實叉難陀等出者同本）

文殊師利根本一字陀羅尼經一卷（長安二年於天宮寺譯沙門慧智等證梵文婆羅門李無諂譯語直中書李無礙筆受初出與後義淨出者同本）

大陀羅尼末法中一字心呪經一卷（神龍元年於大福先寺譯李無諂譯語）

隨求即得大自在陀羅尼神呪經一卷（亦云所得見大周錄長壽二年於東都天宮寺譯闍賓沙門尸利難陀設等證梵文李無諂譯語李無礙筆受）

右七部九卷其本並在。」(T55p567c)とある。

<sup>33</sup>『全唐文』257、5a～7a。（周一良の《唐代密宗》によるもの）、（『文苑英華』865巻に「唐河南龍門天竺寺碑一首」宝思惟について記録されている。）

第四に、A・B・Cの三断簡の内容がつながっている。すなわち、AとCはそのまま続けて解読することが可能である。さらに、Aの「遠渉」とCの「四方」・「道路通達」は関連している。次に、Cの「海水岸边」に「焼香誦咒」して、「一切の龍・魚・阿修羅」悉く（咒者）に供養して、そして、Bの「摩尼之珠」を「咒者」に「奉送」する。といった内容であると理解しうる。

よって、A・B・Cの三断簡の関係はA—C—Bの順であることはほぼ間違いないだろう。

(2)「録外—14」と大正本・敦煌本の関係については、「録外—14」は大正本・敦煌本の経文を参考にしながらも新たに編集された経典の可能性が高い。その根拠は以下の通りである。

第一に、「録外—14」の本文と大正本の本文では1,190字以上がほぼ同文、或いは類似である。3,267字を有する「録外—14」にとっては三分の一強にあたる。

第二に、順番どおりに一致、或いは類似する部分は半分ほど（616文字）あり、前後が倒置されていながらも一致、或いは類似する部分は四分の一以上（334文字）あり、バラバラの順で一致、或いは類似する部分も五分の一（240文字）ある。これほどに順番がバラバラになり、一致或いは類似する部分がほぼ三分の一を占める理由には異訳本・不同系統の写本・抄出本などではなく、編集・撰述しか考えられない。

第三に「録外—14」の本文には大正本の本文の1,190字以上が一致、或いは類似しているので、新たな撰述とはいえないだろう。ほぼ同文部分、或いは類似した部分となる。さらに、「録外—14」のA断簡の35行目後半から42行目前半までの部分と敦煌復元本（S3720部分）の565行目から571行目までの部分は「録外—14」と敦煌本のみが共通に持つ部分があるから、この点から見れば、「録外—14」は敦煌本の本文を引用しながら編集された可能性が高い。

以上の四点から考えるに、「録外—14」は大正蔵本系統・敦煌本系統の経文、或いはその転写したものを参照上で、新たに編集された経典であるといえるのではないだろうか。また大正蔵本と敦煌本の関係は、大正蔵本

が部分的（陀羅尼）に新たな訳を加えた同本異訳本ではなかったろうか。

(3) 本経は、唐代開元年間の（718～735）の間に編纂、或いは訳出された可能性がある。その理由は以下の通りである。

第一に、本経が『首楞嚴経』（700 前後譯出或いは成立）の卷七と一致する、或いは類似する部分が多い（将来に別の論文にて検討する予定）。それだけではなく、唐代阿地瞿多訳の『陀羅尼集経』（654 年訳出、694 年編行）と、宝思惟訳の『仏説随求即得大自在陀羅尼神呪経』（693 年に訳出）とも一致する或いは類似する部分が確認できたので、この三経の中に、本経が典拠とする経典が存在する可能性は否定できないだろう。

第二に、敦煌写本の 1・2・4・5 号の書体や書風からみれば、写経史上最高潮といわれる盛唐代（684～756）に書かれたものに違いないだろう。

第三に、長部和雄氏の研究によれば、漢訳乃至中国撰述の経軌に関する公式は、簡潔→敷衍・複合・雑駁→簡略・変名・変質であるが、本経と本経が典拠とした三経を比較して見ると、本経のほうが敷衍・複合・雑駁のカテゴリーに属するとみられるから、本経がこの三経より後に成立した可能性が高い。ゆえに、本経の成立年代の上限は三者が出来た後（700 年）になるのではないか。

第四に、善無畏（637～735）が唯一尊奉した人物である三藏長老宝思惟が訳したものと一致、或いは類似する。善無畏の訳経に関する文献の中に、本経の記録が見られないため、善無畏が訳したかどうか判断することができないが、大正蔵本では小さい字で「無畏出」の記録があるので、本経の成立は善無畏と関わりのあることは間違いないだろう。

ゆえに、たとえ善無畏の名に仮託されても、善無畏が入唐する以前（713）の成立は不可能であろう。さらに、善無畏が実際に訳経を始めたのは開元 5 年（718）からであり、善無畏は 735 年に亡くなったことから、本経は唐代の開元年間の 718 年から 735 年にかけて成立した可能性が考えられる。

本経は、金剛寺一切経の「録外—14」の三断簡 A—C—B の順からなる金剛寺本系統と大正蔵本系統・敦煌本系統のあわせて三種がそれぞれ同一経の、不同系統の写本であることが明らかになった。さらに、『首楞嚴

經』・『陀羅尼集經』・『仏説隨求即得大自在陀羅尼神呪經』などを典拠として、718年から735年にかけて成立したと推測できる。

### 参考文献

- 『金剛寺一切經の基礎研究と新出仏典研究』基礎研究（A）（1）研究成果報告書・研究代表者落合俊典（国際仏教学大学院大学、2004年）  
 国際仏教学大学院大学学術フロンティア実行委員会編『日本現存八種一切經對照目録』（2006年3月22日）  
 藤枝晃『文字の文化史』（岩波書店、1992年）  
 赤尾栄慶・頼富本宏『写經の鑑賞基礎知識』（至文堂、1994年）  
 京都国立博物館編『古写經——聖なる文字世界——』（京都国立博物館、2004年）  
 鎌田茂雄『中国仏教史』第六卷（東京大学出版会、1999年、719～757頁）  
 長部和雄『唐代密教史雑考』（神戸商科大学経済研究所、1971年）  
 長部和雄『唐代密教史論考』（永田文昌堂、1982年）  
 李小荣『敦煌密教文献論稿』（人民文学出版社、2003年）  
 木宮之彦『入宋僧裔然の研究』（鹿島出版會、昭和58年）  
 頼富本宏『密教仏の研究』（法藏館、1990年）  
 周一良著錢文忠訳『唐代密宗』（『張一良集』第三卷、遼寧教育出版社、1998年、1～152頁）  
 呂微『楞嚴百偽』（『呂微佛學論著選集』齊魯書社、1986年）  
 古坂紘一『大隨求陀羅尼をめぐって』（『北陸宗教文化』第3号、北陸宗教文化研究会出版、1991年、37～47頁）  
 浅井覺超『『大隨求陀羅尼經』梵藏漢對照研究』（『密教文化』第162号、高野山大学密教文化研究会、1998年、91～104頁）

## Summary

A Study of the *Dafo ding bie xingfa*  
大佛頂別行法

LIN Min

The text, whose complete title is *Da fo ding rulai fangguang xidanduo bandanluo dashenli doushi yiqie zhouwang tuoluoni jing da weide zuisheng jinlun sanmei zhou pin diyi* 大佛頂如來放光悉怛多般怛羅大神力都攝一切咒王陀羅尼經大威德最勝金輪三昧咒品第一, is included in volume 19 of the Taishō Canon (No. 947). This version is based on a manuscript which was copied in year 3 of the Enkyu Era 延久 (1071 C. E.) and belongs to the Sanmitsu Collection 三密藏 of Tō-ji 東寺.

The traditional catalogues of Buddhist scriptures contain no reference to the *Dafo ding bie xingfa*. We find, however, a total of 14 manuscripts of the text in the Dunhuang collections. They are complete or partial texts which represent a separate recension different from the Taishō text. Two of them record the date of their copying: one goes back to year 1 of the Tianfu Era 天復 (902), and the other to year 2 of the same era (903). Judging from the palaeographic features of the manuscripts, five of them appear to have been written during early Tang. Roughly speaking, the Dunhuang recension differs from the Taishō version mainly in the *dhāraṇī* 陀羅尼 section, while the portions which precede and follow the *dhāraṇī* are more or less similar.

The recent survey of Nara and Heian Buddhist manuscripts in Japan undertaken by Prof. Toshinori Ochiai led to the discovery of another manuscript of the *Dafo ding bie xingfa* in 2005. The manuscript belongs to the Amano-san Kongō-ji 天野山金剛寺 (Osaka Prefecture) and appears to date back to the late Heian Period (1086–1192). It seems to represent a separate version distinct from the Taishō and Dunhuang recensions. The extant

manuscripts of the *Dafo ding bie xingfa* attest thus to the wide-spread circulation of this scripture in Tang China and Heian Japan.

The stemmata which emerge from the philological analysis of the text are:

- (1) The Kongō-ji lineage (three incomplete fragments named A, B, and C);
- (2) The Taishō lineage (2 MSS and the printed text of the Taishō Canon);
- (3) The Dunhuang lineage (14 MSS, complete or incomplete).

The *Dafo ding bie xingfa* stresses the magical power and merits of the *dhāraṇī*. This does not mean that typical values of Buddhist spirituality are completely absent. The follower is told to cultivate utter sincerity 誠心 which leads to the generation of the aspiration for Awakening (\**bodhicitta* 菩提之心). All Saints will then protect the follower, his or her magical power will increase, and ultimately he or she will attain Liberation (\**vimukti* 解脫). The central interest of the scripture lies, however, in the preaching of various *dhāraṇī*s suited for such worldly purposes like prosperity in trade, protection from diseases, animal epidemics, robbers, disasters, fear, evil people, slanders, insect pests, drowning, sterility, evil spirits, handicaps, the way to make one's house safe or how to complete a journey without dangers, etc.

The *Dafo ding bie xingfa* appears to be very closely related to the *Śūraṅgamasamādhisūtra* 首楞嚴經 in seven scrolls 七卷, a scripture translated or compiled around 700. There is a very large number of similarities and parallel passages between these two texts, which I intend to analyse in detail in a forthcoming paper. The *Dafo ding bie xingfa* also displays marked similitude to the \**Dhāraṇīsamuccaya* 陀羅尼集經 translated by Atikuta 阿地瞿多在 654 and the \**Mahāpratisarādhāraṇī* 佛說隨求即得大自在陀羅尼神咒經 translated by Ratnacinta 寶思惟 in 693.

According to the interlinear remark following the title of the *Dafo ding bie xingfa* in the Taishō Canon, the text was 'translated by Śubhakarasiṃha' 無畏出. In my opinion, however, the rendering of the *Dafo ding bie xingfa* cannot be

attributed to Śubhakarasiṃha 善無畏 (637–735) beyond doubt, but the translator or compiler of this text seems to have been connected to the famous Indian scholar-monk. The translation or compilation of the *Dafo ding bie xingfa* cannot be placed earlier than 700. Since the text is traditionally attributed to Śubhakarasiṃha, the latter's date may also offer a clue. Śubhakarasiṃha was active in China between 713 and 735. He actually began his translation work in year 5 of the Kaiyuan Era 開元 (718). It is thus very likely that the *Dafo ding bie xingfa* may have been compiled or translated between 718 and 735.

*Postgraduate Student,  
International College  
for Postgraduate Buddhist Studies*